バルより傳來の療方ありしを、詳なる事を知らずとも、後にカスバル流と唱ふる事と申す事にや、又別にカスバル姓の外科、渡來の事もありしか、此他長崎にて、吉雄流など云へるは、其後渡來の蘭人より傳へ得たる療方も有て、吉雄流とも申せり、其諸家の傳書といふ者共を見るに、皆膏藥油藥の法のみにて、委しき事なし、斯の如き類にて、備らざる事のみなれども、其業は漢土の外科には大に勝り、又本邦の古へより傳りたる外治には大に勝れりといふべき歟、其中に、翁が見たる檜林家の金瘡の書と云ふものあり、其中に人身中にセイメンといへるものあり、これは生命にあづかる大切のものなりと記せり、今を以て見れば、是れセーニューにして、神經と義譯せしものと思はる、わづかながら、これ程の事を聞書せしは、此書を始とすべし、

○下略

〔蘭學事始上〕一其頃○寛永年間西流と云ふ、外科の一家出來たり、此家は其始南蠻船の通詞、西吉兵衛と云る者にて、彼國の醫術を傳へ、人に施せしが、其船の入津禁止せられて後、又阿蘭陀通詞となり、其國の醫術も傳り、此南蠻阿蘭陀兩流を相兼しとて、其兩流と唱へしを、世には西流と呼しよし、其頃は至て珍らしき事にて有ければ、專ら行はれ其名も高かりしゆへにや、後には官醫に召し出され、改名して、玄甫先生と申せしよし、其男宗春と申されしは、多病にて早世し給ひ、家絕えしとなり、是れ我祖甫仙翁の師家なり、其後召出されし、今の玄哲君の祖父、玄哲先生は、玄甫先生の姪の續なりとなり、右の玄甫先生初て西洋醫流を唱へられしより、公儀にも御用ひ遊されし事にて、阿蘭陀醫事御用に立し始なり、

〔皇國名醫傳後篇上〕西玄甫○中略

玄甫善蕃語、爲和蘭大通事、雅好外科、師歸化蕃醫澤野忠庵、與忠惠交善、每相切劘、寛文中以事往江戸、見忠惠於殿上、退嘆曰、丈夫當如此、乃區々作蠻奴語而終身乎、移病辭職、徙于江戸、亡幾擧爲醫官、